

(2024年1月1日配信)

NHK ラジオ深夜便「明日へのことば」1月4日(木)4時台

## 樺太引き上げ体験の記憶と平和に

重延 浩 演出家(番組制作会社・会長)

きき手:坂口憲一郎

重延浩さんは、終戦の日から1週間後、8月22日、ソ連軍が、広場の避難民に爆弾の雨を降らせるのを見たといいます。恐ろしい光景だったといいます。そして23日には、戦車が、銃を乱射して街に入、暴虐非道のソ連兵に備え、女性達は、顔に泥を塗り、身を隠し、父の病院には、ソ連兵が、銃剣で家の天井や壁をつつき、その様子を、子供の重延さんは見ていました。翌日から、病院管理の若い兵隊が、毎日訪れ、重延さんと言葉を教え合い、いつの間にか仲良くなります。ロシア人は、怖い人、、、ではないと、子供心に感じたといいます。国と国が起こす戦争。人と人が仲良くすることが、平和への道だと強く思うようになったといいます。

## ハソウ贈呈で唐丹訪問

(2019/3月記)

坂口 憲一郎(岡山市)

唐丹小中学校を初めて訪問したのは2年前のクリスマス慰問でした。あの時の子供たちの目の輝きに感動したことは今も目に焼き付いています。

今回は二度目の訪問になりますが、前回と同じように生徒たちの澄んだ瞳の美しさに感動しました。11時30分頃、学校に着き、昼食までの1時間ほど校長室で待つことになりました。

先ず目についたのは、ホワイトボードに貼ってある釜石新聞の記事で、大きな字で「NHK全国短歌・俳句大会で最高賞・きょうEテレで全国放送」という見出しでした。つかさず、「この記事は2年生の上野翔明君の記事ですね」と尋ねると、菊地正道校長先生はこの1年間の学校報「不撓不屈」を見せてくださりながら、生徒たちの活躍ぶりを、次々話してくださいました。3年生の留畑瑞穂さんも『JIKA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト2018』で優秀賞に輝いたことやスポーツ大会での数々の輝かしい成果をお聞きしました。あの震災を乗り越え、皆で助け合って学校生活を送った中で目覚ましい成果をあげた生徒が多くいる事を知り、驚きと同時に目を見張るものがありました。(中略)

午後、体育館で今年の卒業生12名に「ハソウ」と「ハソウ継承者証書」を贈呈させていただきました。キャロル・サックさんが奏でるハープに合わせて高舘さんが「ハソウの祈り」を朗読した後、代表者に「ハソウ」を贈呈させていただきました。



キャロル・サックさんが唐丹の子供たちへ送った歌「I, YOU, WE」を、

ハープを奏でながら歌うのに合わせて、私も一緒にハソウを吹かせていただきました。西洋の楽器ハープと古代の和楽器ハソウが一つに溶け合い、歌詞の「*But we are friends, but we are friends, Friends in the human family.*」の思いが心に沁みてくるのを感じました。世界各地で紛争が絶えず、ハソウが「平和へのメッセージ」になればと思います。